

科目区分 教科専門

授業科目名

A キャリアデザイン論Ⅱ（2回生対象:17名）

B 倫理学Ⅱ・共生の倫理学（3回生対象：学校教育9名、人間社会デザインコース他12名）

「共 common」の領域の構築に向けて2

I 授業評価（5段階：a 良い～e 悪い）

(1) 授業アンケートから(A/B)

問1 この授業に積極的に参加したか。

a 2/2 b 10/10 c 4/6 d 0/0 e 0/0

問2 学びの意欲を喚起したか。

a 4/3 b 8/8 c 4/6 d 0/1 e 0/0

問3 この講義のテーマ・目的は明確か。

a 3/1 b 8/13 c 4/4 d 1/0 e 0/0

問4 学生同士の話し合いの意義

a 9/11 b 6/4 c 1/3 d 0/0 e 0/0

問5 学生の発言への寿の対応

a 5/8 b 10/8 c 1/2 d 0/0 e 0/0

問6 教材選択の妥当性

a 4/5 b 9/6 c 3/7 d 0/0 e 0/0

問7 授業のレベル

a 4/0 b 7/7 c 4/7 d 1/4 e 0/0

問8 この講義で得るものはあったか。

a 9/4 b 6/10 c 1/4 d 0/0 e 0/0

問9 この講義のおすすめ度

a 10/2 b 4/11 c 2/5 d 0/0 e 0/0

問10 良かった点、改善すべき点

A 〈良かった点〉

- ・自己と向き合うことができる。
- ・生徒【大学の二回生になっても依然として自分のことを「生徒」と呼ぶ「学生」が少なからず存在することを私達はどうか考えたら良いのだろうか？】同士の話し合いもあり、たくさんの意見を学ぶことができた。
- ・違う話題で様々な人と話すことができ考え方や見方が増えた。

〈改善すべき点〉

- ・扱う内容が難しくかみくだかないと分かりにくいときがあった。板書が読みにくい。
- ・先生の話に多くの時間が使われている点。

B 〈良かった点〉

- ・レジュメで学生のコメントを用いる点。
- ・難しい題材で簡単に解決できないものを諦めず考え続ける時間だった。学校教育や他の授業で見落とされがちな物事の根幹を知りそれに向き合うきっかけになった。

社会科教育講座 倫理学・哲学 寿 卓三
〈改善すべき点〉

- ・講義がとびとびで内容が頭からとびやすかった。ディスカッションの時間が少なく他の人の考えを知る機会が少なかった。
- ・時間の都合上、どうしても学生の発言の後は先生の発言のみで終わってしまう。学生からも発言できる時間があればと思った。
- ・さまざまな資料が取り上げられたが、それぞれの資料の関連性はよくわからなかったため、資料を減らすなどしてもう少しわかりやすくする必要があるのではないかと思った。
- ・授業回数が少なかった点。
- ・話し合いの場を1コマに1回入れてほしい。

(2) レポートの抜粋

レポートは各自で自由にテーマを設定して論述するという形式であり、それぞれが固有な視点から論じているが、少なからぬ学生の記述に「学びの共同体」の成立の必要性を、さらには大学での学びを現実の暮らしに繋げる力の必要性を実感していることをうかがわせる論述が見られた。その一部を抜粋してあげておきたい。

A① 自分の満足できる生活を望むのなら、他者の満足感についても同時に考えなければならぬと、ここまで考えて気づいた。社会は、多くの人の考え方が動いた方向に向かって変化していく。自分の存在意義や、仕事のやりがいを感じる人がいない人を放置して自分さえ満足できる生活ができれば良いと考える人が多数なら、不況で生活状況が悪化しても自分のことだけ考えて、結局元の豊かな生活には戻れない可能性もある。お互いが豊かな生きがいのある生活を送ることができるよう行動すれば、自然と自分の生活も心が満たされるものになるということに気づいたとき、賃金を得るためだけではなく、能力を発揮することにも重点を置いた働き方が実現できると私は考える。

② 私も大学生になり、アルバイトをし始めた。今でも4つほど掛け持ちでバイトをしているが、私が経験したなかで一番きつく、サービス労働

が多いと感じたのが「ブライダルスタッフ」の仕事である。私が働いていた場所では、ブライダルスタッフは、仮に10時半からの披露宴だったとしたら事務所集合が8時半という二時間前集合を要求される。そしてそこから制服に着替えて、身だしなみも整えて出発する。ここまでは、確かにブライダルスタッフという仕事上、身だしなみにはお互いが強く気をつけなければいけないため、給料がでなくてもこの仕事をしたいのであれば仕方ないし、当然のことのように思えるのだが、私が疑問を感じていたのはこの後の仕事内容である。披露宴場につくのが、大体一時間前でそこから自分の担当卓のグラスチェックや、今日の披露宴の内容が知らされる。そして10時半に開場されるのだが、披露宴場に来てから開場までの1時間は時給に換算されない。私は最初そのことに気付かなかった。初めての給料をもらったとき、思っていたより少ないという気持ちになり、また同じような気持ちになった人はほかにも多くいたようだった。サービス労働はこれだけではなかった。披露宴が時間内に終わらない場合は、その時間を過ぎてからの片づけはサービス労働だったようだ。社員さんに「延長大丈夫？」と言われない日はその時間の給料はついていなかった。何を基準に給料がつく場合とつかない場合があるのかはわからなかったが、それを聞くことはできなかった。サービス労働が多い仕事はいやだ、わりに合わないと思ってそこはやめてしまったが、私のように疑問を感じながら仕事をしている人は多いと思う。しかし、なぜおかしいという文句を言わなかったのか、黙っていたのかを考えると、やはり他の人も何も言わないのだから自分が言ってもどうにもならないし、言うことで誰かに迷惑をかけてしまうという思いが強いからだと考える。

こうして私たちは職場での理不尽なことに何も言うことなくただ黙々と働き続ける。自分の職場が、いわゆる「ブラック企業」ということに気づきながら辞めることも出来ない。労働者の声はどこで叫ばれるのだろうか。愛媛大学でも、「ブラック企業」で働いている人に対する相談会などが行われているが、そのような会に参加している人はどれほどいるのか。私たちはこれが、労基法違反という認識を十分に持ってそれに抗議していかなば永遠にこの連鎖は食い止められることがないだろう。

B① 私たちにとって、自分がどのような存在で

あるのか、ということは重要である。そして、それを理解するということが、自分自身を知り、認めるということになるかもしれない。しかし、私たちにとって重要であるのは、自分がどのような存在であるかを考えてそこで終わらせるのではなく、これまでの自分と今の自分を考えたうえで、これからはどのような存在になりたいか、そうするためになにをすべきか考えることではないだろうか。そして、その途中で方向が変わっても構わない。行き先が変わることだってある。その度に考えながら、ときには「それでもいいや」とあきらめながら、次に自分がどうしてみたいかを考えながら生きていくことではないだろうか。そして、その作業は自分自身だけのものではない。その作業のなかでさまざまな人と出会い、「その人」と「わたし」が共に生きるために、向き合い、ふたりの共通のルールを作っていく。そのルールも自分たちによって変わっていく。そういったさまざまなプロセスのなかで、自分が「そうなのかもしれない」と感じた「わたし」を、次はどうなりたいか考えながら見つめることこそが、「自己への承認」であるのかもしれないと私は考えた。

II 講義の総括

我々の目の前にいる学生の読解力、聴く力、発話能力の低下は、近年すでに危険水域を越えている。人文科学・社会科学に定位しつつ学校教育に関与する者にとって、読解力、聴く力、発話能力の不足は手足をもがれたも同様である。

我々の多くは、「双方向性」の学びや当事者意識の涵養の重要性を講義で力説しているであろう。しかし、我々の授業そのものが言うところの「双方向性」の授業となっているだろうか。学生同士に議論させれば、双方向性、当事者意識の涵養になると勘違いしていないだろうか。

学生からの声にもあったように、①講義と話し合いのバランスをどうするか、②議論の質の高まり、深化を学生が実感できるための手立てをどうするか、③個別／小集団／全体という講義の展開においてこの全体の次元でどう論点を整理し、より質の高い問いを創造し次のサイクルにつなげるか、④全体において共有すべき問いを教師が暴力的に設定するのではなく、教師と学生、学生相互、学生と教材との創造的協働作業として問題の創造していく手法はいかなるものか。

課題意識を皆さんと共有できればと思う。